

## いつか音楽と呼ばれるもの 試論

Note: To be Called as Music

城一裕

Kazuhiro Jo

音楽と呼ばれるものの認識には時代とともに変容が訪れている。すでに、作曲家/演奏者/聴衆、という枠組みはもはや揺らぎつつあり、音は数字列として扱われることで、その利用の形態を劇的に変化させている。一方、時間と空間とを共有した音体験に対する人々の関心は増してきており、新たな音表現の試みも日々行なわれている。

本テキストは、筆者がこれまでに関わってきた3つの音を扱うプロジェクト、The SINE WAVE ORCHESTRA、Monalisa、aeoの紹介を通じ、現在音楽と呼ばれるものに対する認識を揺らし、「いつか音楽と呼ばれるもの」について、演奏と聴衆との関係、作曲の役割、数字列としての音と画像、リアルタイムでの音の生成、という視点から考察を試みるものである。

なお、本テキストに記している内容はあくまでも、筆者の試論かつ私論であり、プロジェクトのほかのメンバーたちと必ずしも合意に至っているわけではない。

### The SINE WAVE ORCHESTRA

The SINE WAVE ORCHESTRA (SWO)<sup>[1]</sup>は、集合的なサウンドパフォーマンスのプロジェクトであり、4人のコアメンバー（筆者、古館健、石田大祐、野口瑞希）によって主催されている。各々の参加者が1人1本のサイン波を演奏する、という基本的なアイデアの下に参加者を募り、サイン波の海ともいべき集合的な音表現を作り出す。

サイン波とは、その波形がサイン関数によって表わされる波のことであ

り<sup>[fig.1]</sup>、振幅、周波数、位相というパラメータにより定義できる。

SWOのパフォーマンスは、その都度、異なる時間的、物理的な条件の元に行なわれ、結果として、各々のパフォーマンスの参加者に対して異なる音体験をもたらすことになる。

例えば、「ネクスト——メディア・アートの新世代」の関連イベントとして2004年6月19日に東京オペラシティ協の石段で行なわれたThe Stairway of The SINE WAVE ORCHESTRA<sup>[fig.2]</sup>では、約1時間のあいだ、光のあて方で周波数と音量とが変化する球形のサイン波発生装置を配布された参加者が、ラップトップ・コンピュータやシンセサイザーなどのサイン波を発生させられる装置を持ち寄ったほかの参加者たちとともに音を奏で、サイン波の海を形作った。

かつて、ロラン・バルトは、「2つの音楽がある（少なくとも、私はいつもそう考えてきた）。聴く音楽と自分で演奏する音楽とである。この2つの音楽は全く別の芸術であり、それぞれ固有の歴史と社会学と美学とエロス論とを持っている」<sup>[2]</sup>と記し、専門家である職業音楽家の出現により「演奏する音楽」はその姿を消した、と述べた。

一方、The Stairway of The SINE WAVE ORCHESTRAでは、各々

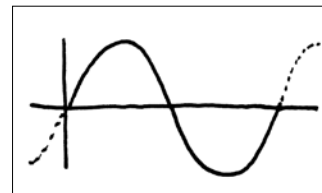


fig.1——サイン波。フーリエの理論によれば、周期性を持つすべての音は複数のサイン波から合成することができ、逆に周期性を持つすべての音は複数のサイン波の組み合わせに分解することができる。

fig.2——The Stairway of The SINE WAVE ORCHESTRA

提供=NTT InterCommunication Center